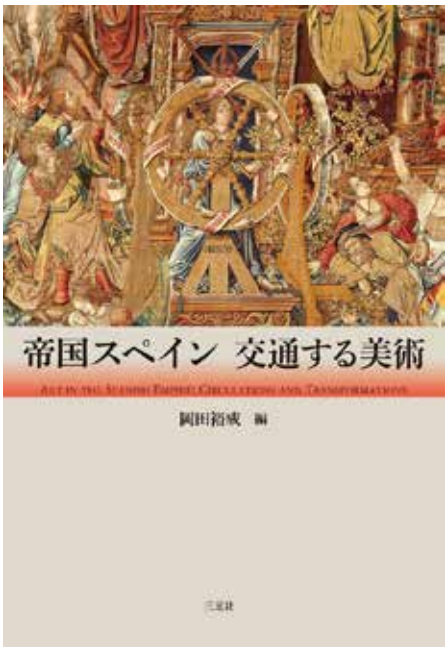
著者からのひとこと

岡田裕成編
『帝国スペイン　交通する美術』
三元社、2022

16 ～ 17 世紀にスペインは、ヨーロッパのネーデルラント、ミラノ公国、ナポリ王国など、そして大西洋を越えたアメリカ大陸、さらに太平洋アジアにまたがる広大な領域の「世界帝国」を打ち立てました。かつてない規模で人、モノ、情報が行き交う空間が出現したのです。そこではどのような美術作品が作られ、移動され、受け止められたのでしょうか。この大きな問題に、大阪大学の岡田裕成先生を代表とする科研費研究プロジェクト（2017 ～ 20 年度）では各自の専門領域からアプローチを重ね、また内外から専門家を招いて取り組んできました。

その成果であるこの論集は、三つのセクションに大別されます。I では中世との接続が扱われます。スペインとポルトガルの新大陸進出は、いわゆる「レコンキスタ」（キリスト教徒による対イスラム再征服活動）の続編とでもいうべき側面があります。ハプスブルク・スペインはカトリックしか認めませんでしたが、それでも 8 世紀間もの間「隣人」であったイスラムの記憶がそう簡単に消え失せはしないのが美術・建築という物質文化の面白い点です。

II ではヨーロッパ内部に目が向けられ、ネーデルラントとタピスリー、イタリアと彫刻、ギリシアのクレタ島からイタリアを経てスペインへ渡った移動の画家エル・グレコと裸体表現の問題に焦点が当てられます。従来の西洋美術史で馴染みのある芸術家名が一番登場するのはこのセクションでしょう。とはいえ、タピスリーのように、これまで美術史の枠内では十分に注目されてこなかったジャンルや作品が取り上げられます。



III では新大陸からマドリードの王宮にもたらされたインカ王像、アジア発祥の「屏風／ビオンボ」（この不思議な、あるいはまだるっこしい表記の理由は、長くなるので、本書をご覧ください）の新大陸における展開、マニラ、メキシコ、スペインへ海を渡った日本の蒔絵螺鈿など、これまで限られた美術館や展覧会でしか触れることの叶わなかった作品とその文脈を知ることができます。太平洋や大西洋を往還するグローバルな規模での文化交渉の一端が見えてきます。

本書により、ハプスブルク・スペインの「交通する

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

美術」の多様な側面を垣間見ていただけると嬉しい限りです。

（久米順子）